

店舗新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

東中筋遺跡

2015年6月

香川県農業協同組合
高松市教育委員会

例　言

1. 本書は、J A 香川県桜町支店新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書で、高松市桜町二丁目に所在する東中筋遺跡の調査報告を収録した。
2. 発掘調査及び整理作業については、高松市教育委員会が実施した。
東中筋遺跡の調査は、平成26年度に高松市創造都市推進局文化財課 文化財専門員 舟築紀子・波多野 篤、同非常勤嘱託職員 磐崎 福子・上原 ふみが担当した。
3. 本報告書の執筆・編集は、歴史と磯崎が行った。
4. 本報告書掲載の遺物写真撮影は、西大寺フォトに委託した。
5. 本書の挿図として、国土地理院発行2万5千分の1地形図「高松北部」「高松南部」及び高松市市計画図2千5百分の1を一部改変して使用した。
6. 本報告書の標高値は東京湾平均海面(T.P)を表し、座標は国土座標第IV系(世界測地系)に拠つた。また方位は座標北を表す。
7. 出土遺構の縮尺は、1/40・1/100を基本とし、出土遺物の実測図は、土器は1/4、石器は1/2を原則とした。
8. 本書で用いる遺構の略号は次のとおりである。
SK：土坑 SD：溝 SX：性格不明遺構 SP：柱穴
9. 土壌及び土器観察の色調表現は、『新版 標準土色帳』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修)による。
10. 発掘調査で得られた資料は、高松市教育委員会で保管している。

目　次

第1章 調査の経緯と経過	2
第2章 地理的環境・歴史的環境	3
第3章 調査成果	5
第4章 まとめ	16

挿　図

第1図 調査位置図(S=1/5,000)	2
第2図 周辺遺跡分布図	4
第3図 東中筋遺跡遺構配置図	6
第4図 SK 平・断面図	7
第5図 SK 7出土遺物	8
第6図 SK 5出土遺物	9
第7図 据立柱建物1出土遺物	9
第8図 SX 8 平・断面図	10
第9図 SX 8出土遺物	11
第10図 SD 6 平・断面図	12
第11図 SD 2・3 平・断面図	12
第12図 据立柱建物1平・断面図	13
第13図 SD 1 平・断面図	14
第14図 SP 平・断面図	14
第15図 SD1・2・3出土遺物	15
第1表 土器観察表	17
第2表 土器観察表	18
第3表 石器観察表	18

写真図版

全景(南東から)	19
全景(北西から)	19
据立柱建物1 完掘状況(西から)	19
SX 8 遺物出土状況(北から)	20
SX 8 A断面(東から)	20
SK 5(東から)	20
SD 1 A断面(南から)	21
SD 3(西から)	21
SK 4(北から)	21
SK 9(北西から)	21
SD 2 A断面(西から)	21
SD 6 A断面(西から)	21
SK 7(東から)	21
SK29(北から)	21
SK 7出土遺物	22
SK 5出土遺物	22
SX 8出土遺物	23
SD 1・SD 3・据立柱建物1出土遺物	23

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯と経過

a. 経緯と経過

平成26年度に高松市桜町二丁目780番地1、781番地1において事業が計画され、事業者等から本市教育委員会（以下、市教委）に対して包蔵地照会があつた。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地ではないが、「東中筋遺跡」に隣接することから、試掘調査実施の協議を事業者等と本市とで行つた。協議後、事業者の依頼に基づき、市教委が平成26年9月29・30日の実働2日で、試掘調査を実施することとなつた。

試掘調査の結果、当該地に遺構・遺物が確認できたため、市教委は事業者に対して、当該地において保護層を確保できない掘削工事を行う場合は、事前に埋蔵文化財に対する保護措置が必要である旨を伝えた。

その後、10月に、当該地において事業を計画している旨の報告が、事業者である香川県農業共同組合からあり、当該地の文化財保護に対する協議の依頼が市教委にあつた。協議内容は、①現時点での工事計画、②発掘調査の内容、③費用負担、④発掘調査を実施した場合の工程、について双方で協議を進めた。その間、当該地で工事が実施されることが確定したため、事業者から10月14日付けで文化財保護法第93条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の届出が市教委に提出された。その届出を市教委から香川県教育委員会（以下、県教委）に連絡したところ、10月29日付けで県教委から工事着手前に発掘調査を実施する旨の指導があつた。

県教委からの指導を受けて、発掘調査の実施に向けて再度事業者と市教委が協議を重ね、費用面等の合意が形成されたため、12月3日付けで事業者と高松市及び市教委の3者で協定を締結し、「J A香川県桜町支店新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査監理業務」として、埋蔵文化財の発掘調査を実施することとなつた。

なお、協定書締結になるが、事業者の意向で発掘調査全般を業務委託することとなり、11月28日付で事業者と事業者が選定した委託業者である株式会社村上組の双方で埋蔵文化財発掘調査に係る契約が交わされた。

調査の概要は次のとおりである。

対象面積：255m²

調査担当：高松市教育委員会



第1図 調査位置図 (S=1/5,000)

調査原因：J A香川県桜町支店新築工事

調査期間：平成26年12月3日～12月17日

b. 本工事における埋蔵文化財の保護措置

平成26年9月に実施した試掘調査の結果から、現地盤から最も浅い部分で約0.4mの深さで遺構面が確認できた。遺構面から30cmの保護層を確保できない掘削工事は、基礎と梁の設置工事であったが、地盤改良を実施するため、包蔵地の範囲内の建物建設部分となつた。

第2節 発掘調査の経過（調査日誌抄）

発掘調査は、平成26年12月3日から開始し、12月11日に調査を完了し、調査道具の撤収を終え、現地調査がすべて完了した。調査期間は、実働7日である。

調査日誌抄（平成26年12月3日～12月11日）

12月3日（水）調査開始。重機掘削と遺構検出を行う。溝や土坑などの遺構を検出。

12月6日（土）人力掘削開始。SD1・2・3を掘削。平行して記録作業を実施。

12月8日（月）SD1・2・6、SK4・5を掘削。SK5から多くの遺物出土。

12月9日（火）掘立柱建物1、SD1・6、SK7、SX8を掘削。SK7から多くの遺物出土。

12月10日（水）SK7・9・29、SX8、ピットを掘削。SX8から弥生土器壺が出土。全景写真撮影。人力掘削終了。

12月11日（木）記録作業完了。道具の撤収作業を行う。現地調査完了。

第2章 地理的環境・歴史的環境

第1節 地理的環境

高松平野は、完新世に入ってから形成されたものである。讃岐山脈から南下し、瀬戸内海へと注ぐ香東川をはじめ、本津川、春日川、新川などによって搬出された堆積物により緩やかな傾斜の扇状地を形成している。現在石清尾山山塊の西を直線に北流する香東川は、17世紀に人工的に固定されたもので、それ以前には石清尾山山塊の南側を回りこんで平野中央部を東北流する流路も存在していた。

本遺跡が所在する高松市街の中心に近づくにしたがい傾斜が緩やかになっており、ここには海岸線に沿って東西方向に延びる微高地の砂堆が形成されており、海の影響を受けていたと考えられる。ボーリングデータによれば、栗林公園付近から松飼町、久米池より北側では海成層の存在が確認されている。高松市街地付近では、現地表面下10～12m以浅が最終氷河期以降の堆積物であると推測できる。本遺跡に東隣する桜町中学校でのボーリングデータでは、現地表面下3mまではシルト質砂、3～7mは粘土、7～8mはシルト質砂、8m以下は礫となっている。この現地表面下8mが沖積層と洪積層の境であり、これより上が最終氷河期末以降の堆積物である。

第2節 歴史的環境

周辺部に位置する最古の遺跡として、縄文時代晚期中頃頃の居石遺跡がある。旧河道から突堤帯以前の土器及び土掘り具を中心とした石器、伐採具と考えられる木製品が出土しており、安定した平野部においては既に開墾・農耕の初現が見られる。また平成11～12年に実施された東中筋遺跡の第2次調査では、縄文時代後期から近世に至る遺構・遺物が確認され、縄文時代晚期～弥生時代の小区画水田、縄文土器や弥生土器、石器が出土している。

弥生時代では海岸により近い遺跡として、環濠集落が確認された天溝・宮西遺跡、弥生時代末～古墳時代の掘立柱建物跡等が検出された木太中村遺跡が挙げられる。近年では、海岸に位置する高松城跡下層の調査で、弥生時代後期の土器が海拔0mよりやや上位の砂堆から磨滅を受けずに出土する事例が認められ、今後の調査において海浜部でも遺跡が確認される可能性が高い。

平野部では弥生時代後期の集落が多く確認されており、古墳時代になると石清尾山山頂や尾根において多くの積石塚古墳群が造営される。なお、古墳時代の集落については、平野部において後期以降から出現する。古代においては、屋島で古代山城が築かれ、平野部では松飼下所遺跡で見られるような条里区画が認められるようになる。

古代末～中世では石清尾山の北東部から旧市街地に至る地域が野原庄に比定されており、その海浜部にあたる高松城跡（丸の内地区）では、9～10世紀代の生活痕が確認され集落の所在が明らかになっている。さらに高松城跡（西の丸地区）では、12～13世紀代の湊と考えられる礫敷きの港湾遺構が検出されている。平野部では、多くの城館が所在していたことが知られている。近世では、高松城の築造、それに伴う城下町の形成、香東川の付け替えと共に関連した干拓と新田開発が進んだ。

【参考文献】

- 高松市教育委員会 1992～1996 「瀬戸内町弘福寺前の調査Ⅰ・Ⅱ」
香川県教育委員会 1992～96 「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告 第1～6冊」
高松市教育委員会 1993～95 「一般国道高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1～7冊」
高松市教育委員会 1998 「宮川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 木太中村Ⅱ道路」
高松市教育委員会 1998～2001 「太田筋2土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1～4冊」
高松市教育委員会 1999～2000 「郡小計画道路宇町新山崎埋蔵文化財発掘調査報告 書 第1～2冊」
高松市教育委員会 2001～2004 「郡小計画道路東浜港東～宮前道路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 東中筋道路 第1～2冊」
香川県教育委員会 2003 「高松城跡（西の丸地区）Ⅲ」
香川県教育委員会 2003 「高松城跡（丸の内地区）」



第2図 周辺遺跡分布図

第3章 調査成果

第1節 調査の方法

a. 遺構番号と遺物の取上げ

遺構には、遺構の種類に関係なく検出した順番で1から番号を与えた。遺構の種類は、現地での調査所見をもとに性格を判断し、遺構番号の上に遺構の略号を冠した。

遺物の取上げは、遺構単位で、かつ出土土層が明らかな場合は、層位も記載して取上げた。

b. 記録作成

図化作業の際に使用する基準点は、事業者が測量した世界測地系第IV系・4級基準点を用いた。水準点は、発掘調査の委託業者が、調査地に最も近い4級水準点から直接水準で基準点に標高を移設した。

以上のとおり設置した基準点を用いて、平面図・断面図とともに手測りで記録を作成した。

第2節 基本層序

調査区の基本層序は、耕作土（約0.4m）と床土（約0.05m）直下で、褐色細砂～シルトの地山面となり、遺構はこの地山面で重複して確認できた。

第3節 遺構と遺物

S K 4（図4）

調査区中央南端で検出した不整形な形状の土坑で、調査区外へと延びる。最大長3.1m、最大幅1.3m、最大深0.26mを測る。

断面は浅い皿状を呈し、埋土は、上層が黒褐色細砂混じりシルト、中層が黒褐色シルト混じり粘土と黒褐色細砂混じりシルト、下層が褐～褐色極細砂混じりシルトの4層である。

遺物は弥生土器片が出土したがいずれも細片で、詳細な時期は不明である。

S K 7（図4・5）

調査区中央東側で検出した土坑でSD 3とSD 6に切られる。平面形状は卵形を呈し、最大長2.0m、最大幅1.6m、最大深0.68mを測る。

断面形状は逆台形で、埋土は、上層が褐灰色シルト混じり粘土で、下層は水平に堆積し、褐灰色細砂混じりシルト、褐灰色シルト混じり粘土、褐灰色細砂混じりシルト、黒褐色粘土混じりシルト、褐灰色粘土混じりシルト。

りシルトである。

遺物は、弥生土器壺（1～10）、壺底部（11・12）、弥生土器無頸壺（13）、壺（14・15）、弥生土器片、微細剥離痕のある剝片（S 1）、サヌカイト剝片が出土している。また、弥生土器壺（14・15）は、胎土が他の遺物とは異なることから、搬入品の可能性がある。出土遺物の年代から、弥生時代中期の遺構と考えられる。

S K 5（図4・6）

調査区中央西端で検出した不整形な形状の土坑で調査区外に延びる。最大長2.7m、最大幅2.6m、最大深0.84mを測る。

断面形状は方形で、埋土は上層が黒褐色中粒砂混じり極細砂～シルト、黒褐色中粒砂～シルト、黒褐色中粒砂混じりシルト、中層がにぶい黄褐色極細砂、黒色粗砂混じりシルト、黒褐色中粒砂混じりシルト、黒褐色～灰黃褐色細砂混じりシルト、下層がにぶい黄褐色極細砂～シルト、最下層が黒褐色～にぶい黄褐色細砂混じりシルト、暗褐色細砂混じりシルトである。

遺物は、弥生土器壺（16～24）、弥生土器壺（26～29）、弥生土器鉢（25・30・31）たたき石（S 2）、弥生土器底部、粘土塊、弥生土器片、サヌカイト剝片、安山岩剝片が出土している。最下層から16～18・20～24・26～31と安山岩剝片が、下層から19・25が出土した。また、弥生土器壺（29）は、胎土が他の遺物とは異なることから、搬入品の可能性がある。出土遺物の年代から、弥生時代中期の遺構と考えられる。

S K 9（図4）

調査区中央西側で検出した土坑で、平面形状は梢円形を呈する。最大長0.9m、最大幅0.6m、最大深0.25mを測る。

断面は楕円形に段落ちする。埋土は、上層が褐灰色シルト混じり粘土、下層が褐～灰褐色細砂混じりシルト、にぶい黄褐色細砂混じりシルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

S K 29（図4）

調査区中央で検出した土坑で、面形状はSD 6に切られて不明である。最大長0.8m、最大幅0.45m、最大深0.1mを測る。

断面形状は浅い皿状を呈する。埋土は、黄灰色シルト混じり細砂と黄灰色シルトの2層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

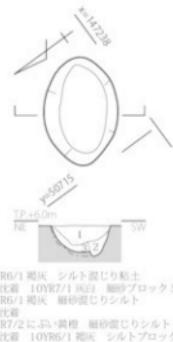


第3図 東中筋遺跡遺構配置図

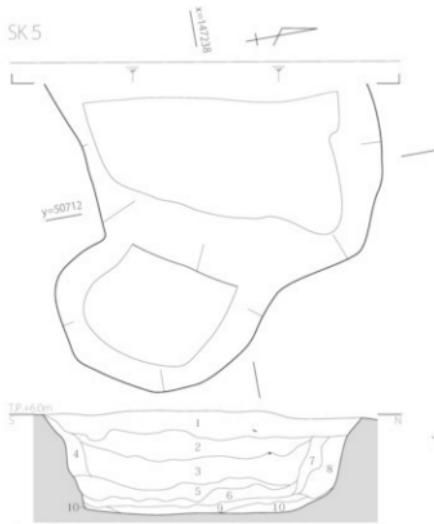
SK4



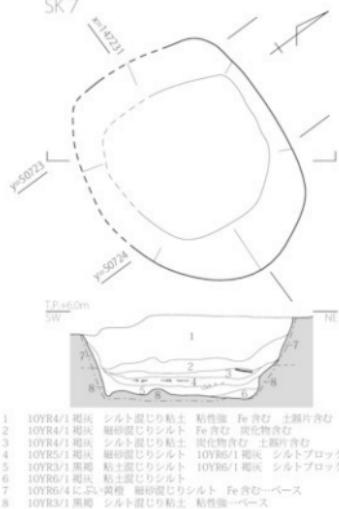
SK 9



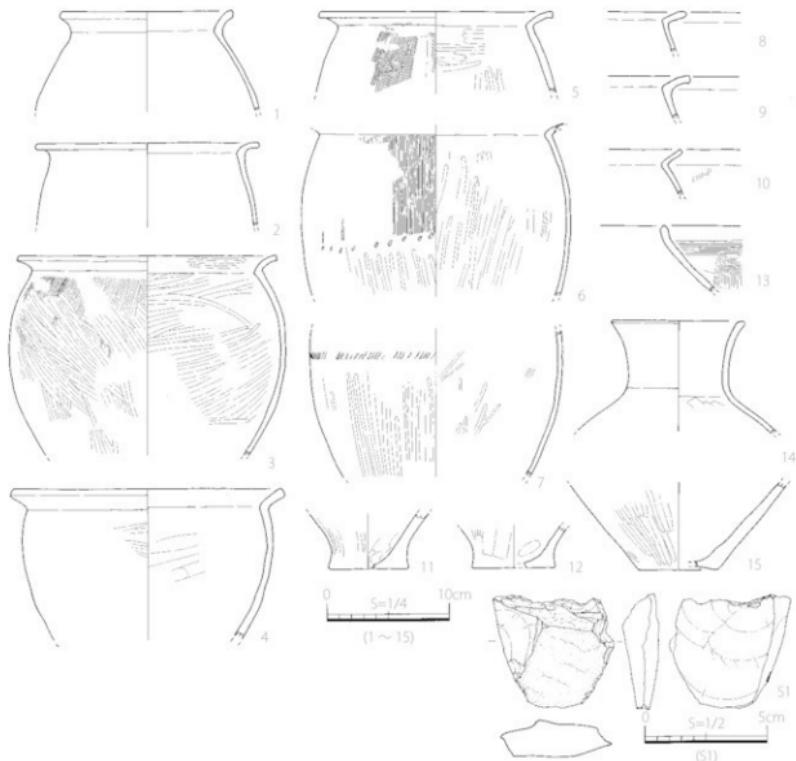
SK 5



SK 7



第4図 SK平・断面図



第5図 SK 7出土遺物

S X 8 (図8・9)

調査区西端部で検出した不整形な遺構で、湾曲して南東へ調査区外に延びる。SD 1・2・3・6に切られる。長さ 11.5m、最大幅 1.9m、最大深 0.28m を測る。

断面形状は不整形で、埋土は東側で上層が灰黄褐色シルト混じり粘土、中層が褐色細砂混じりシルト、下層が灰黄褐色細砂混じりシルトの3層である。下層から弥生土器壺(図9-34)が出土した。西側では、上層が灰黄褐色シルト混じり粘土、中層が黒褐色粘土と褐色シルト混じり細砂、下層が褐色粘土混じり極細砂～細砂である。

遺物は、弥生土器壺(32～34)、弥生土器高杯(35・36)、スクレイバー(S 5)、たたき石(S 6・S 7)、石皿(S 8)、弥生土器底部、弥生土器片が出土して

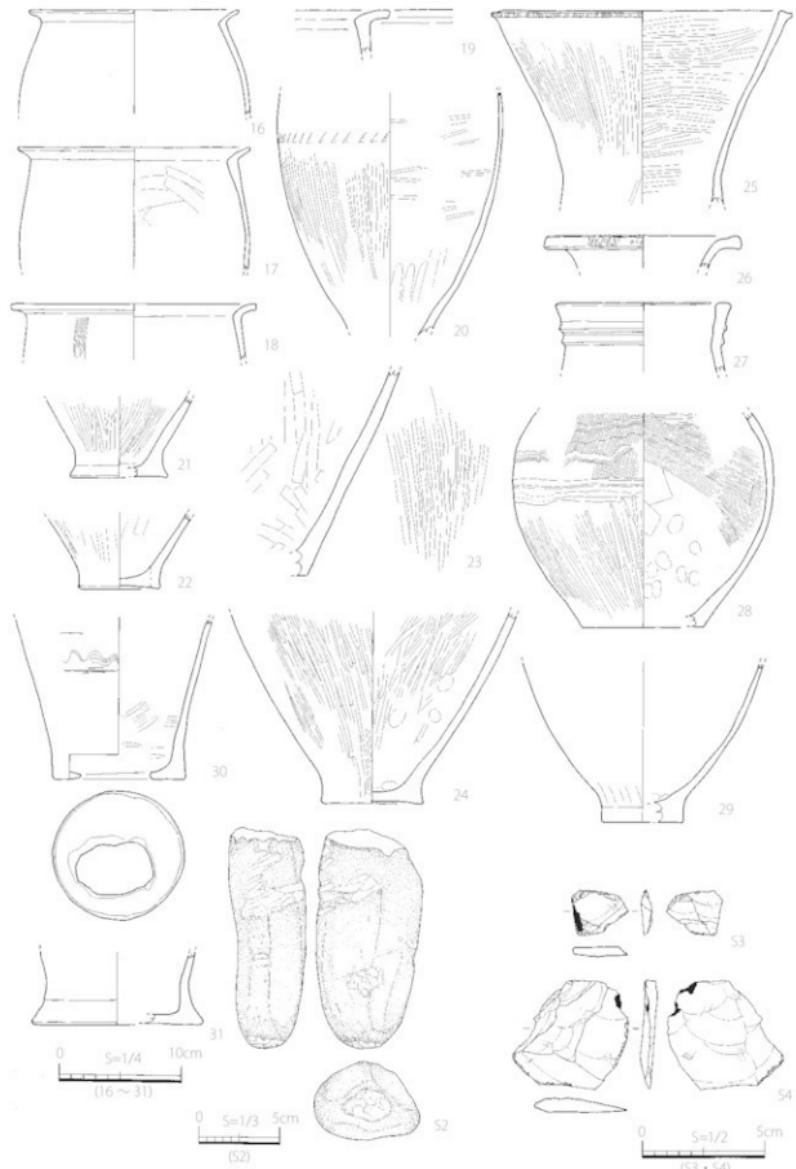
いる。このうち、弥生土器壺(34)は、口縁部が欠損し、体部に穿孔がある。土器の形状や胎土から、搬入品の可能性が考えられる。出土遺物の年代から、弥生時代後期中～後葉の遺構と考えられる。

S D 6 (図10)

調査区を東西に横断する溝で、SD 1・2・3と掘立柱建物1に切られる。検出長 19m、最大幅 0.7m、最大深 0.13m を測る。主軸方位 N-66.5°-W である。

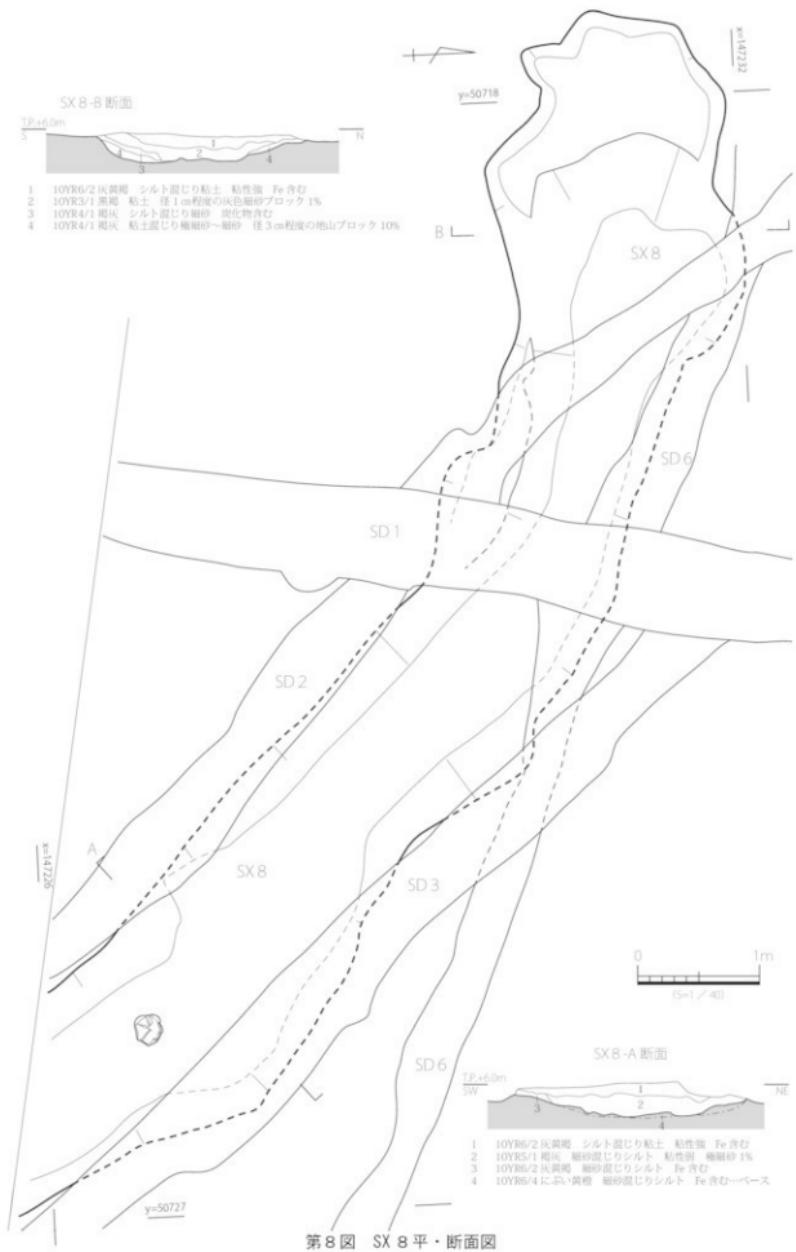
断面形状は、東側でU字形、西側で浅い皿状を呈する。埋土は、東側で灰黄褐色細砂混じりシルトの単層、西側で上層が褐色シルト混じり粘土、下層がにぶい黄褐色細砂混じりシルトの2層である。

遺物は弥生土器片が出土しているが、小片のため詳細な時期は不明である。

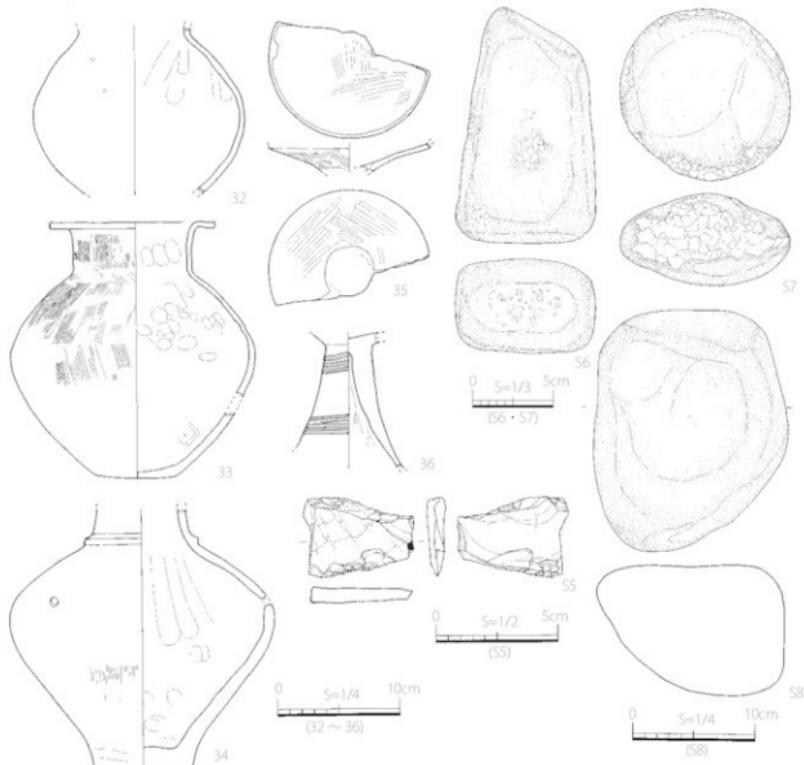


第6図 SK 5出土遺物

第7図 掘立柱建物 1出土遺物



第8図 SX 8 平・断面図
- 10 -



第9図 SX 8出土遺物

掘立柱建物 1 (図7・12)

調査区中央西側で検出した掘立柱建物で、SD6を切る。2間×5間、ピット16基で構成される。桁行5.3m、梁間3.0m、芯芯距離1.5～0.6mを測る。主軸方位はN-89.4°-Wである。

ピットの形状は円形で、断面形状はU字形と筒型を呈する。深さ0.3～0.1m、埋土は、おおむね柱痕が黒褐色極細砂～シルト、掘方埋土が暗褐色中粒砂混じり極細砂～シルト、灰黄褐色極細砂～シルト、にぶい黄褐色極細砂～シルトである。SP18以外は柱痕が確認できた。

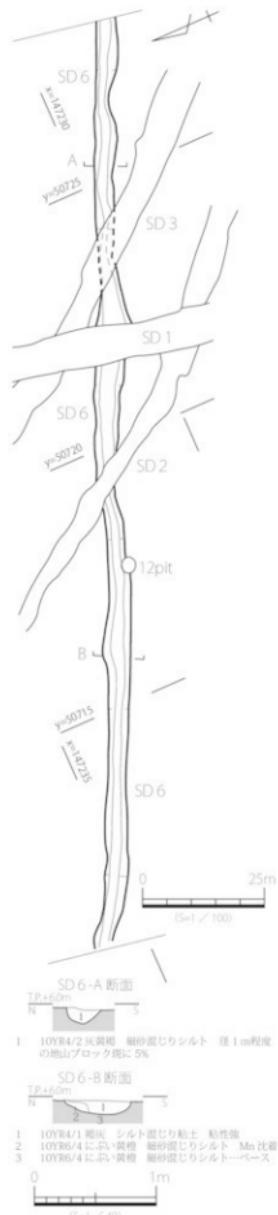
遺物は、二次加工のある剝片(S7)、微細剝離痕のある剝片(S8)と弥生土器片が出土している。

SD 2 (図11・15)

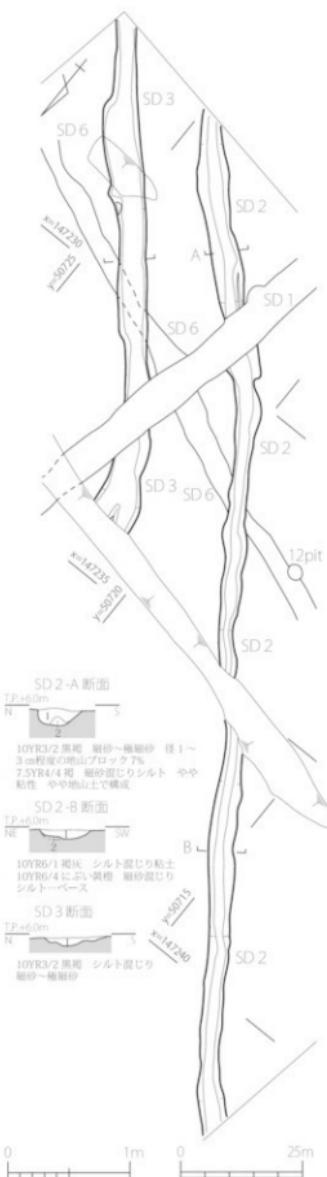
調査区を北西から南東に斜行して調査区外に延びる溝である。SD 1に切られ、SD 2を切る。検出長21.0m、最大幅0.7m、最大深は東南側で0.14m、北西側で0.07mを測る。主軸方位はN-38.9°-Wである。

断面形状は東南側で逆台形、北西側で浅い皿状を呈する。埋土は、東南側で上層が黒褐色細砂～極細砂、下層が褐色細砂混じりシルト、北西側で褐灰色シルト混じり粘土の単層である。

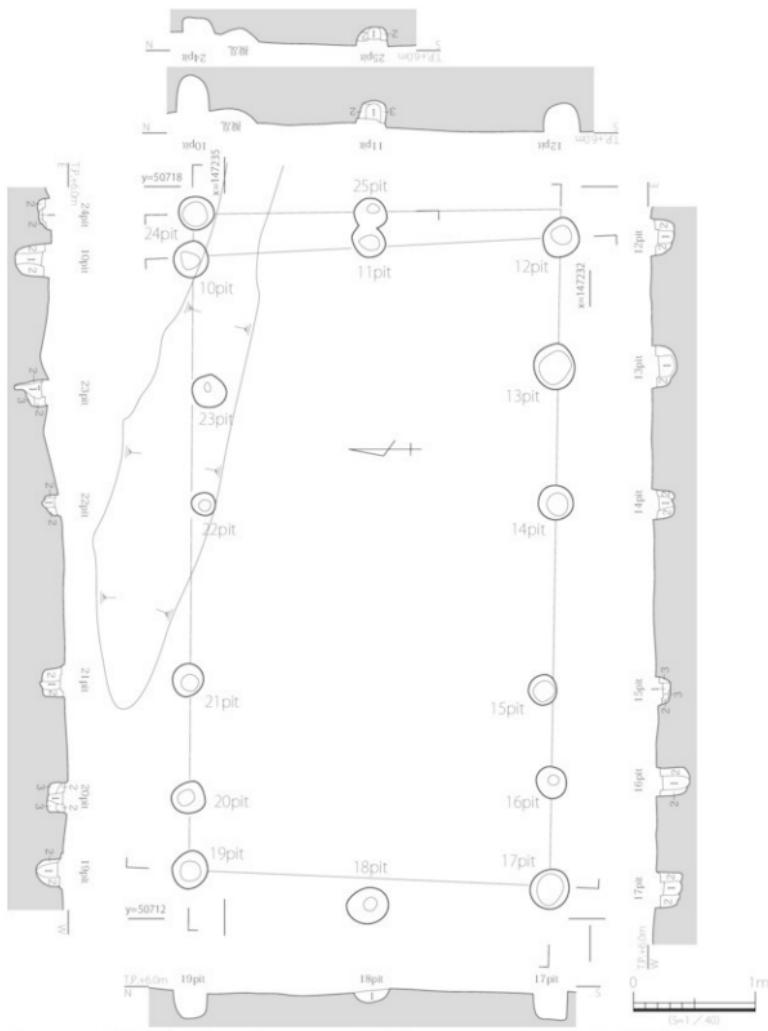
遺物は弥生土器壺(41)、弥生土器片が出土しているが、詳細な時期は不明である。



第10図 SD 6 平・断面図

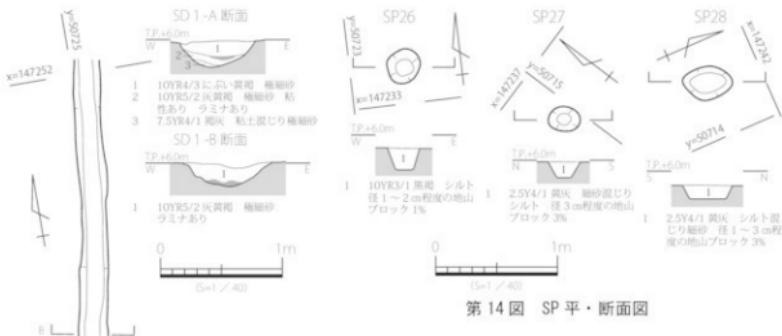


第11図 SD 2・3 平・断面図

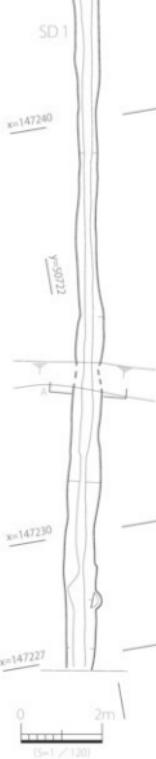


10pit 1	10YR3/2 黒褐色	極細砂～シルト
2	10YR3/3 喀斯特	半粒の混じり極細 砂～シルト
11pit 1	10YR3/1 黒褐色	細砂～シルト
2	10YR3/2 喀斯特	細砂～シルト
3	10YR4/2 黄褐色	極細砂～シルト
12pit 1	10YR4/2 淡黄褐色	極細砂～シルト
2	10YR4/3 喀斯特	細砂～シルト
13pit 1	10YR3/3 黑褐色	極細砂～シルト
2	10YR4/2 黄褐色	極細砂～シルト
14pit 1	10YR4/2 淡黄褐色	極細砂～シルト
2	10YR4/2 黄褐色	極細砂～シルト
15pit 1	7.5YR3/1 黑褐色	極細砂～シルト
2	10YR3/1 黑褐色	極細砂～シルト
3	10YR4/2 黄褐色	極細砂
16pit 1	7.5YR3/1 黑褐色	極細砂～シルト
2	10YR3/2 黄褐色	極細砂～シルト
17pit 1	10YR2/2 黄褐色	極細砂～シルト
2	10YR4/2 黄褐色	極細砂～シルト
18pit 1	10YR4/2 黄褐色	極細砂～シルト
19pit 1	10YR4/2 黄褐色	極細砂～シルト
18pit 1	10YR4/2 黄褐色	極細砂～シルト
19pit 1	10YR4/2 黄褐色	極細砂～シルト
20pit 1	10YR4/2 黄褐色	極細砂～シルト
2	10YR4/2 黄褐色	極細砂～シルト
21pit 1	10YR3/1 黑褐色	極細砂～シルト
2	10YR3/2 黑褐色	極細砂～シルト
22pit 1	10YR4/2 黄褐色	極細砂～シルト
23pit 1	10YR3/2 黑褐色	極細砂～シルト
3	10YR4/3 に少々青褐色	極細砂～シルト
24pit 1	10YR3/1 黑褐色	極細砂～シルト
2	10YR4/2 黄褐色	極細砂～シルト
25pit 1	10YR3/2 黑褐色	極細砂～シルト
3	10YR4/2 黄褐色	極細砂

第 12 図 据立柱建物 1 平・断面図



第14図 SP平・断面図



第13図 SD 1平・断面図

SD 3 (図11・15)

SD 2に平行して調査区外に延びる溝で、SD 1に切られ、SD 6を切る。擾乱により北側は検出できなかった。検出長10.6m、最大幅0.9m、最大深0.07mを測る。主軸方位はN-38.7°-Wである。

断面形状は不整形で、埋土は黒褐色シルト混じり細砂～極細砂の単層である。北端部で二股に分かれる様相が見られるが明確でない。遺物はサヌカイト剣片2点(S10-S11)、甕(40)、須恵器杯(39)、弥生土器底部、弥生土器片が出土した。出土遺物の年代から、奈良時代以降と考えられる。

SD 1 (図13・15)

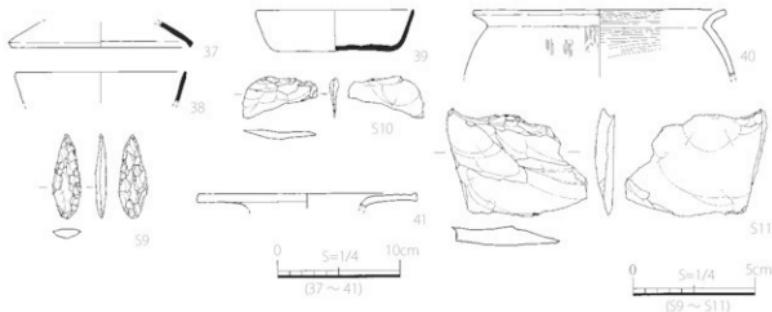
調査区を南北に縱断して調査区外に延びる溝で、SD 2・3・6・SX 8を切る。検出長65.0m、最大幅0.8m、最大深は南側で0.21m、北側で0.18mを測る。主軸方位はN-9.8°-Eである。

断面形状は皿状を呈する。埋土は、南側で上層にぶい黄褐色極細砂、中層が灰黄褐色極細砂でラミナが確認でき、下層が褐灰色粘土混じり極細砂である。北側では灰黄褐色極細砂でラミナが確認できる。埋土が他の遺構とは異なり、灰色の極細砂であること、切り合いで関係をもつ遺構をすべて切っていることから、当調査区で最も新しい時期の遺構と考えられる。調査区が位置する地形には沿わず、南北方向に真直ぐに掘削されており、またラミナが認められることから、条里と関連した水路であった可能性が考えられる。

遺物は石鐵(9)、須恵器蓋(37)、須恵器壺(38)、弥生土器片、土師器片、須恵器片が出土した。出土遺物は非常に磨滅していたが、水流によって磨滅したものと推定できる。埋土の状況から、奈良時代以降～中世の遺構と考えられる。

SP 26 (図14)

調査区中央東側で検出したピットで、平面形状は円形、断面形状は逆台形を呈する。最大長0.27m、最大幅0.26m、最大深0.18mを測る。埋土は黒褐色シルトで単層である。遺物は出土していない。



第15図 SD1・2・3出土遺物

SP 27 (図14)

調査区中央西側で検出したピットで、平面形状はや
や楕円形、断面形状は逆台形を呈する。最大長0.26m、
最大幅0.2m、最大深0.13mを測る。埋土は黄灰色細
砂混じりシルトで単層である。遺物は出土していない。

SP 28 (図14)

調査区北西部で検出したピットである。平面形状は
楕円形、断面形状は逆台形を呈する。最大長0.4m、
最大幅0.27m、最大深0.11mを測る。埋土は黄灰色
シルト混じり細砂で単層である。遺物は出土していな
い。

包含層

重機掘削中に弥生土器片、土師器片、陶器片が、精
査中に弥生土器片、土師器片が出土した。

第4章　まとめ

第1節　遺跡と遺構

本遺跡は、旧香東川から派生する旧河道域に位置するとともに、海からの影響を受ける三角州に近い環境にあったと想定される。このことから、縄文時代晚期以前は、河川の活発な活動により不安定な土地条件であったと推測される。以前の調査では、縄文時代晚期以降の遺構や遺物がまとまって出土しており、河川の活動が比較的治まったと想定される。

今回の調査では、弥生時代中期と弥生時代後期、古代以降、中世の4時期に区分することができる。このうち、弥生時代中期の遺構から出土した遺物では、遺構による時期的な差異はなく、短期間に形成されたと考えられる。また調査区中央より北側では、弥生時代の遺構を確認できず、弥生時代中期～後期の集落の北端にあたると考えられる。

以前の調査で検出した縄文時代晚期～弥生時代前期の遺構や遺物は確認できなかったことから、遺跡周辺の狭い範囲内で時期ごとに異なる土地利用がなされていた可能性がある。調査地は、西側から東側へと緩やかに傾斜する平地に位置し、遺構面も現在の地形と同様に西側が高く、東側が低い地形を呈する。遺構は、調査区南側の微高地上で検出した。弥生時代と奈良時代の溝は、地形に沿って溝が掘削されているが、SD1のみこの地形に沿わず、南北方向に掘削され、また一定の水流があったことがうかがえる。この溝が条里に伴う溝かどうかの判断は、今回の調査ではできないが、中世段階までにこの地域の土地利用が大きく変更された可能性が考えられる。

第2節　遺物について

今回の調査で出土した遺物は、弥生時代中期のものが土坑から、弥生時代後期の遺物が落ち込み状の遺構から出土した。完形品は無く、破損した土器をまとめて土坑などに投棄したものと考えられる。

遺物の器種は、甕と壺が大半で、高杯や鉢といった器種は一定量認められる。また、在地の胎土とは異なる遺物も一定量認められることから、本遺跡以外の地域とも交流があったことがうかがえる。今回の調査地は、集落の中心からは外れた箇所である可能性が高く、南西方向の微高地上に展開していると考えられる居住部分について、調査事例の蓄積を待ちたい。

第1表 土器観察表

器文番号	遺構/層位名	種類	器種	時期	法量		調整		色調		粘土	焼成	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
1 SK 7	弥生土器	甕	Ⅲ様式	13.8	—	(8.2)	マフ・テリ?	マフ	にぶい 黄褐色 10YR6/4	にぶい 黄褐色 10YR6/4	4mm以下 の石英・長 石を含む。1.5mm 程度の赤色粒を含む	良	9と同一 個体の可 能性あり
2 SK 7	弥生土器	甕	Ⅲ様式	18.3	—	(6.8)	マフ・テリ?	マフ	にぶい 黄褐色 10YR6/4	灰黃褐色 10YR5/2	1mm以下の石英・長 石、0.5mm以下 の金雲母・角閃石を含む	良	
3 SK 7	弥生土器	甕	Ⅲ様式	21.2	—	(16.3)	マフ・ヘリのち ー・一部ハリ	ハリ付	にぶい 黄褐色 10YR6/4	にぶい 黄褐色 10YR5/4	4mm以下の石英・長 石等を含む。0.5mm 程度の角閃石を含む	良	
4 SK 7	弥生土器	甕	Ⅲ様式	22.0	—	(12.4)	マフ・ハリのち ー	指付E・マフ	にぶい 黄褐色 10YR7/2	灰黃褐色 10YR6/2	3mm以下の石英・長 石を含む	良	
5 SK 7	弥生土器	甕	—	19.0	—	(6.6)	ハリ・マフ	マフ・ヘリ付	にぶい 黄褐色 10YR5/2	にぶい 黄褐色 10YR6/3	3mm以下の長石、1mm 以下の金雲母含む	良	
6 SK 7	弥生土器	甕	—	—	—	—	ハリ・ヘリ付・キ 制目	コマツ・ヘリ付	にぶい 黄褐色 10YR6/4	灰黃褐色 2.5YR6/2	0.5mm以下の石英・長 石を含む	良	外面に黒 斑あり
7 SK 7	弥生土器	壺	—	—	—	—	マフ・ヘリ付・キ 列点文	マフ付	暗紅黃 2.5YR5/2	灰黃褐色 2.5YR5/3	1mm以下の石英・長 石を含む	良	
8 SK 7	弥生土器	甕	—	—	—	(3.3)	マフ・マフ	マフ・マフ	にぶい 黄褐色 10YR7/2	灰白 10YR8/1	1mm以下の石英・長 石を含む	良	
9 SK 7	弥生土器	甕	—	—	—	(3.8)	マフ	マフ	明赤褐色 5YR6/6	や や 3.5mm以下の石英・ 長石等を含む。1mm 程度の赤色粒を含む	1と同一 個体の可 能性あり		
10 SK 7	弥生土器	甕	—	—	—	(3.7)	マフ・ハリ	マフ・マフ	にぶい 黄褐色 7.5YR6/4	灰黃褐色 10YR6/2	3mm以下の石英・長 石を含む	良	
11 SK 7	弥生土器	甕	—	—	—	(4.6)	ヘリ付・マフ	指付E・マフ	灰黃褐色 10YR4/2	黑褐色 10YR3/2	1mm以下の石英・長 石を含む	良	
12 SK 7	弥生土器	甕	—	—	—	(3.1)	板付マ・ヘリ付	指付E	灰黃褐色 10YR4/2	灰黃褐色 10YR4/2	1mm以下の石英・長 石右含む	良	底部に穿 孔あり
13 SK 7	弥生土器	無頸壺	Ⅲ様式	—	—	(5.5)	マフ・船底直 縫文1本 付のち櫛彫 波状文5本	マフ	灰白 10YR8/2	灰 5YR5/5	や や 1~3mmの石英・長 石を含む	良	外面に黒 斑あり
14 SK 7	弥生土器	壺	Ⅲ様式	10.6	—	(9.1)	マフ・マフ	指付E・マフ	にぶい 黄褐色 10YR7/3	にぶい 黄褐色 10YR7/2	4mm以下の石英・長 石、2mm以下の赤色 粒含む	良	搬入品 か?
15 SK 7	弥生土器	壺	—	—	6.4	(7.2)	ヘリ付・指付 E・マフ・マフ	マフ・マフ	灰白 10YR8/1	灰白 10YR8/2	2mm以下の石英・長 石・赤色粒含む	良	外面に黒 斑あり 搬入品 か?
16 SK 5 最下層	弥生土器	甕	Ⅲ様式	17.0	—	(8.6)	マフ・マフ	マフ・マフ	にぶい 黄褐色 10YR5/3	灰黃褐色 10YR5/2	3.5mm以下の石英・ 長石、0.5mm程度の 金雲母を含む	良	
17 SK 5 最下層	弥生土器	甕	Ⅲ様式	19.0	—	(10.0)	マフ	マフ・マフ	にぶい 赤褐色 5YR6/3	にぶい 黄褐色 7.5YR6/3	3mm以下の石英・長 石、0.5mm程度の 金雲母・赤色粒 を含む	良	
18 SK 5 最下層	弥生土器	甕	Ⅲ様式	20.0	—	(4.6)	コマツ・タリ付	マフ	にぶい 黄褐色 7.5YR5/4	黑 5YR2/1	1mm以下の石英・長 石を含む	良	
19 SK 5 下層	弥生土器	甕	—	—	—	(3.6)	マフ	マフ	明赤褐色 7.5YR5/6	にぶい 黄褐色 10YR5/3	2mm以下の石英・長 石、1~2mm以下の 石英・長石・赤色粒 を含む	良	
20 SK 5 最下層	弥生土器	甕	Ⅲ様式	—	—	—	マフ・制目・ハ リ付	ハリ付・キ・マフ	にぶい 黄褐色 10YR5/3	灰黃褐色 2.5YR5/3	0.5mm以下の石英・長 石・金雲母含む	良	
21 SK 5 最下層	弥生土器	甕	—	—	7.8	(6.7)	ヘリ付・マフ	ハリ付	暗紅黃 2.5YR5/2	灰黃褐色 2.5YR4/1	2mm以下の石英・長 石・金雲母含む	良	
22 SK 5 最下層	弥生土器	甕	—	—	6.2	(6.2)	ヘリ付・マフ	板付E・マフ	明赤褐色 7.5YR6/7	黑褐色 7.5YR3/1	2mm以下の石英・長 石・角閃石・雲母・ 赤色粒含む	良好	
23 SK 5 最下層	弥生土器	甕	—	—	—	(16.8)	ヘリ付	板付E	灰黃褐色 10YR5/2	灰黃褐色 10YR6/2	2mm以下の石英・長 石・雲母・赤色粒 を含む	良好	
24 SK 5 最下層	弥生土器	甕	—	—	8.0	(15.7)	ヘリ付・マフ	マフ・ヘリ付	灰黃褐色 10YR4/2	にぶい 黄褐色 10YR5/3	1.5mm以内の石英・ 長石・雲母・赤色粒 を含む	良好	外面部部 に黒斑あ り
25 SK 5 下層	弥生土器	鉢	—	22.8	—	(15.9)	制目・ハリ付 +3マフ	ハリ付	明赤褐色 5YR5/6	にぶい 黄褐色 10YR5/3	0.5~2mm以下の石 英・長石を含む	良好	搬入品 か?
26 SK 5 最下層	弥生土器	壺	Ⅲ様式	15.6	—	(2.7)	口縁部:斜行 子文 体部: 7マフ	マフ	灰白 10YR8/1	灰白 10YR8/1	2mm以下の石英・長 石・赤色粒を含む	良好	

第2表 土器観察表

器文番号	遺構／層位名	種類	器種	時期	法量			調整		色調		粘土	焼成	備考	
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面				
27	SK 5 最下層	弥生 土器	壺	Ⅲ様式	12.2	—	(5.7)	貼付突帯2条 マフ	マフ	にぶい 黄橙 10YR7/2	にぶい 黄橙 10YR7/2	粗	4mm以下の石英・長 石・赤色粒を含む	良	
28	SK 5 最下層	弥生 土器	壺	Ⅲ様式	—	10.0	(17.6)	ヨリカ・櫛描波 状文(1束5 本)2条・マフ マフ	指付マ・マフ	灰黄褐色 10YR6/2	黒N2/	普	0.5mm以下の石英・ 長石を含む	良好	
29	SK 5 最下層	弥生 土器	壺	—	—	6.4	(13.1)	板付マ・マフ	マフ・指付マ	赤橙 SYR8/3	にぶい 赤 SYR7/3	粗	2mm以内の石英・長 石・赤色粒を含む	良	外側に黒 斑あり 焼入品 か?
30	SK 5 最下層	弥生 土器	鉢	—	—	10.4	(13.3)	櫛描直線文・ 櫛描波状文(4 条)・マフ	ヨリカ・マフ・マフ	橙 SYR7/6	灰褐色 7.5YR6/2	粗	5mm以下の石英・長 石等を多量に含む	良	底部に穿 孔あり 焼入品 か?
31	SK 5 最下層	弥生 土器	鉢	—	—	13.6	(6.0)	マフ・マフ	マフ	にぶい 赤 7.5YR5/4	にぶい 赤 7.5YR5/4	普	3mm以下の石英・長 石等を含む。1mm程 度の赤色粒あり	良	外側に 煤?付着
32	SX 8	弥生 土器	壺	—	—	—	—	マフ・マフ	指付マ・板付 マフ	にぶい 黄橙 10YR6/4	にぶい 黄橙 10YR6/4	普	5mm以下の石英・長 石・赤色粒を含む	良	体部のみ 焼成
33	SX 8	弥生 土器	壺	V-6	13.5	6.4	21.0	マフ・マフ	指付マ・板付 マフ	にぶい 黄褐色 10YR5/3	灰黄褐色 10YR5/2	普	5mm以下の砂粒含む	良	外側に黒 斑あり
34	SX 8	弥生 土器	壺	V様式	—	8.0	(21.8)	マフ・マフ・マフ	指付マ・板付 マフ	灰黃 2.5Y7/2	褐灰 10YR4/1	普	5mm以下の石英・長 石・赤色粒を含む	良	穿孔1か 所あり 焼入品 か?
35	SX 8	弥生 土器	高杯	V様式	—	—	—	分割ヨリカ・キ 内盤充填	分割ヨリカ・キ	にぶい 黄褐色 10YR6/3	にぶい 黄褐色 10YR5/3	粗	2mm以内の石英・長 石・角閃石・赤色粒 を含む	良好	
36	SX 8	弥生 土器	高杯	—	—	—	—	櫛描文・マフ	指付マ・絞り 目	にぶい 黄褐色 10YR5/3	にぶい 黄褐色 10YR5/4	精 良	1mm以下の金雲母、2 mm以下の角閃石、4 mm以下の長石・赤色 粒を含む	良好	
37	SD 1	須恵 器	蓋	古代	14.5	—	(2.0)	マフ	マフ	灰白 2.5Y8/1	浅黄 2.5Y7/4	普	0.5~2mm以下の石 英・長石を含む	良	
38	SD 1	須恵 器	蓋	古代	13.8	—	(2.6)	マフ	マフ	灰白 3.5Y7/1	灰黄 2.5Y7/2	普	0.5mm以下の石英・ 長石を含む	良	
39	SD 3	須恵 器	杯	古代	12.8	10.0	3.4	マフ	マフ	灰白 0.7/1	灰白 0.7/1	普	0.5mm以下の石英・ 長石・黑色粒を含む	良	
40	SD 3	弥生 土器	甕	V様式	20.5	—	(5.6)	ヨリカ・マフ ヘリカ・キ	ヨリカ・マフ ヘリカ・キ	にぶい 赤 7.5YR5/4	にぶい 赤 7.5YR5/6	普	1mm以下の石英・長 石・金雲母を含む	良	
41	SD 2	弥生 土器	高杯	Ⅲ様式	17.8	—	(1.3)	マフ	マフ	にぶい 赤 7.5YR5/4	にぶい 赤 7.5YR5/4	普	0.5~1mm以下の石 英・長石・角閃石を 含む	良	

第3表 石器観察表

編文 番号	遺構／層位名	器種	法量				石材	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
S1	SK 7	微細刻離痕 のある剝片	4.7	5.0	1.5	31.9	マフ	両側面に微細刻離痕あり
S2	SK 5	たたき石	(13.4)	6.5	5.1	(507.2)	砂岩	端部・体部・側面に敲打痕あり
S3	縦立柱建物1 10pit	剝片	1.9	2.4	0.4	2.3	マフ	端面に擦れ
S4	縦立柱建物1 23pit柱根	微細刻離痕 のある剝片	4.5	4.75	0.7	10.9	マフ	端部・両側面に微細刻離痕あり
S5	SX 8	スクレイバー	3.5	4.55	0.8	12.1	マフ	剝片端部に凹部を作り出す
S6	SX 8	たたき石	14.4	8.5	5.8	1083.9	砂岩	一部に敲打痕あり
S7	SX 8	たたき石	10.5	10.4	5.7	759.8	砂岩	全側面に敲打痕あり
S8	SX 8	石皿	20.9	16.0	10.7	4500.0	砂岩	使用痕あり
S9	SD 1	石繩	3.5	1.2	0.4	1.8	マフ	凸基II式 全体に磨滅
S10	SD 3	剝片	1.7	3.1	0.4	1.2	マフ	
S11	SD 3	微細刻離痕 のある剝片	4.4	5.8	0.9	20.5	マフ	端部に微細刻離痕あり



図版2



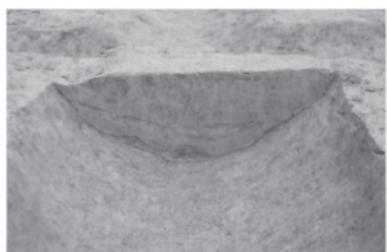
SX 8 遺物出土状況
(北から)



SX 8 A断面 (東から)



SK 5 (東から)



SD 1 A断面 (南から)



SD 2 A断面 (西から)



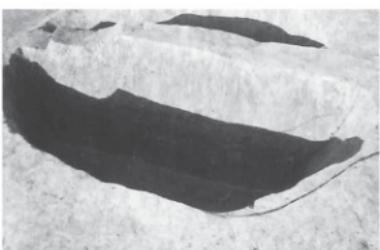
SD 3 (西から)



SD 6 A断面 (西から)



SK 4 (北から)



SK 7 (東から)



SK 9 (北西から)



SK29 (北から)



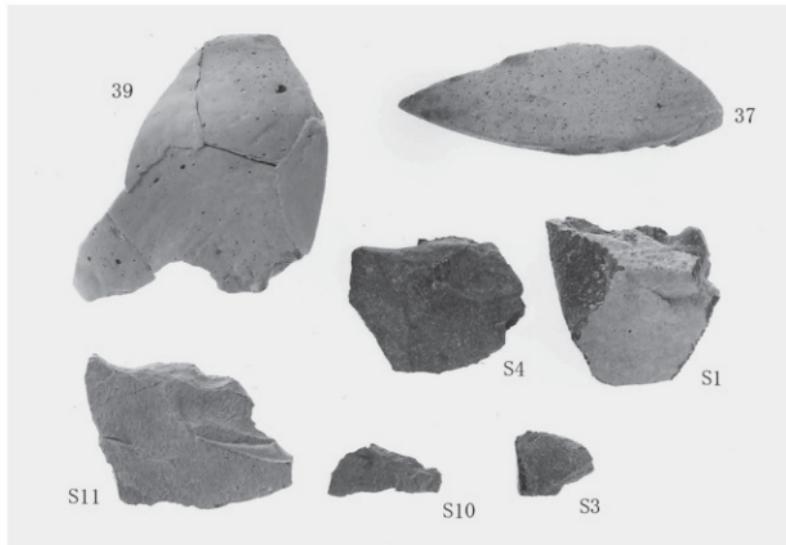
SK 7 出土遺物



SK 5 出土遺物



SX 8 出土遺物



SD 1・SD 3・掘立柱建物 1 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ひがしなかすじいせき							
書名	東中筋遺跡							
副書名	店舗新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第 162 集							
編著者名	船塚 紀子・磯崎 福子							
編集機関	高松市教育委員会							
所在地	〒 760-8571 香川県高松市番町一丁目 8 番 15 号 TEL.087(839)2660							
発行年月日	平成 27 年 6 月 30 日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひがしなかすじいせき 東中筋遺跡	桜町二 丁目	37201		34° 19' 14"	134° 3' 14"	H26.12.3 ~ 12.11	255m ²	店舗建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			
東中筋遺跡	集落	弥生時代	溝、土坑、性格不明遺構 掘立柱建物		弥生土器、石器			
		古代 中世	溝 溝		須恵器、土師器 須恵器			

高松市埋蔵文化財調査報告第 162 集

店舗新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

東中筋遺跡

平成 27 年 6 月 30 日 発行

発 行 香川県農業協同組合
高松市寿町一丁目 3 番 6 号

編 集 / 発 行 高松市教育委員会
高松市番町一丁目 8 番 15 号

印 刷 有限会社 中央ファイリング
高松市伏石町 2157-7